

地域課題としての水俣病を通じた 普遍的課題の異分野間共有と記録の継承

中川 亜紀治 (鹿児島大学 理学部 理学科 物理・宇宙プログラム), 農中 至 (鹿児島大学 法文学部 法経社会学科 地域社会コース)

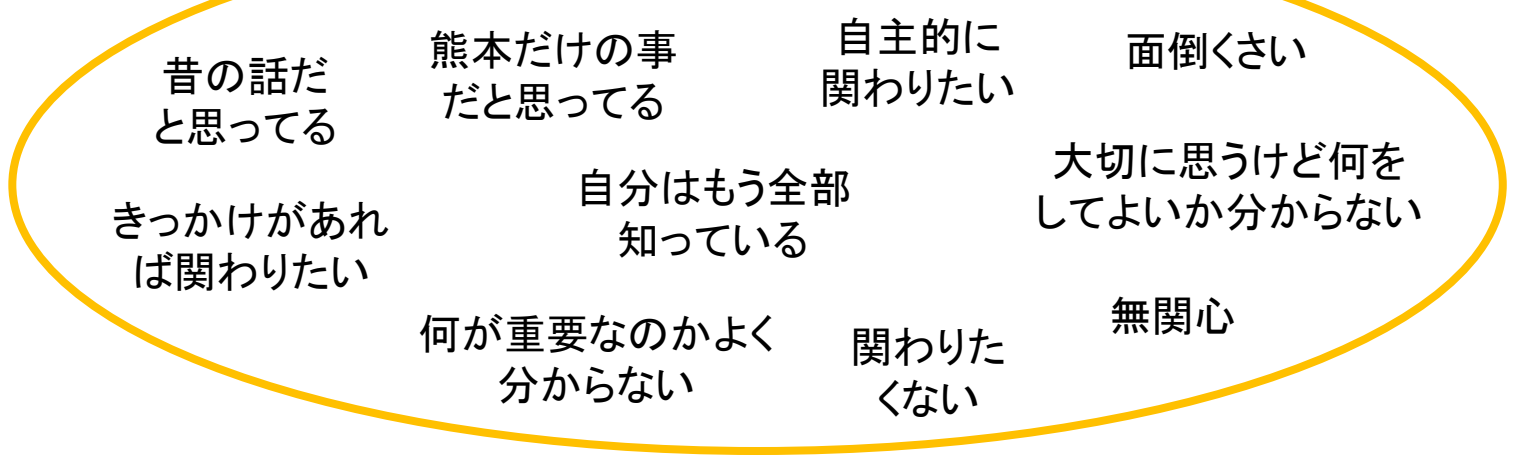
1 プロジェクトの目的

多様なアプローチにより、水俣病が持つ普遍的な重要性を
世代や分野を超えて共に認識し、継承することを目指す

- 水俣病は鹿児島と熊本の両県で起こっている問題であることを認識したい
そのためにもまず、先入観を排し、今に続く水俣病の史実の整理を大切にす
また背景にある近代の社会構造変革、高度経済成長期の特性などの様々な要因も理解する
- 蓄積された膨大な史実と研究成果は社会の財産であり、水俣病は分野や時代を超えて後生に
重要な教訓を伝えていることに気づきたい
- 鹿児島には原因企業チッソのルーツである曾木第二発電所遺構があるなど、その深い縁を
再認識することにより「水俣病」と「鹿児島の近現代」をつなげて考えたい
- 活動を幅広い学部や市民と共有することで、学問分野間や大学と市民の間にある垣根
をまたいで、教育と研究に寄与することを目指す

世代や居住地域などにより、水俣病に対する
人々の姿勢は様々である。文学、社会、自然科学、
写真表現、観光などの複数の視点を設けて、水俣
病問題への関心の間口を広げる工夫を試みる。

水俣病への関心の濃淡



2 プロジェクトの4つの柱と実現形態

- 文学と水俣病 → 水俣病読書会 ('23/10/6-'24/1/19, 計9回)
- 写真と水俣病 → 写真家とのシンポジウム開催 ('23/12/2)
- 現場を旅する → 出水調査 ('23/12/3), 水俣ツアー ('24/2/20,21)
- 記録と継承 → 今後記録誌を作り、研究会や雑誌での報告も行いたい



4 活動アルバム

3 プロジェクトの実施内容

水俣病読書会

苦海浄土 第2部 神々の村 (石牟礼道子、河出書房新社) をと
りあげ、隔週の金曜日18時に開始。学生に市民(新聞記者、農
業、幼稚園教諭、小学校教諭など)も加わり、計14名の参加者
があった。毎回3名が割振られたページを音読し、その後意見交
換を行った。2023年10月6日から合計9回を実施した。

シンポジウム

2023年12月2日(土)、大阪より写真家の小柴一良氏を招い
てシンポジウムを開催。第1部では「水俣病のおさらい」と
題して事実関係を整理し、第2部では「写真家との対話」と
して小柴氏を中心に水俣病の写真表現に関する講話や対談を
行った。水俣市や出水市より元チッソ労働者らの参加もあり、
シンポジウムへの意見を頂いた。

出水調査と水俣ツアー

2023年12月3日(日)、出水市荒崎地区や米ノ津地区の漁港な
ど、1970年代なかばの小柴氏の取材地を訪ねた。そこで聞い
た声からは、水俣病がまだ辛うじて周囲の知人や物を介した
「直接的経験」として記憶されていることが分かった。しかし
近い将来、水俣病が資料などによる「間接的経験」でしか記憶
されない時が来るのは明らかである。2024年2月20日には読書
会の参加者と1泊2日の日程で水俣ツアーを実施した。

■シンポジウムの感想から (一部を編集)

- 水俣病を学ぶ事は社会を、そして人間を学ぶ事になります。
…写真は美しいし、相手のことを思い撮られているから惹
かれます。
- 非演出写真としての長崎の原爆の写真(焼き場の少年)と、
演出された写真としてのユージン・スミスの写真、どちらも
意味があると思います。ユージンの写真は石牟礼道子さんの
苦海浄土に相当すると理解しました。
- 患者さんがいなくなったら終わりではなく…人々がどう向
き合ってきたかを人の歴史として必ず伝えていかなくては
ならない。
- 自身は生まれも育ちも水俣であり…現在は水俣出身と堂々
と言える。なぜなら、仮に差別的な発言をされたとしても、そ
の人が水俣病に関心があると捉えることができるからだ。
反対に水俣病に無関心になるという事態がいちばん怖い。間
違った解釈をしている人がいるなら、それを正せばいいため、
これからも水俣出身と自信を持って言いたい。
- 大阪地裁の判決をニュースで知り、恥ずかしながら「水俣病
の裁判はまだ終わっていなかったんだ」と衝撃をうけた。

5 活動の記録

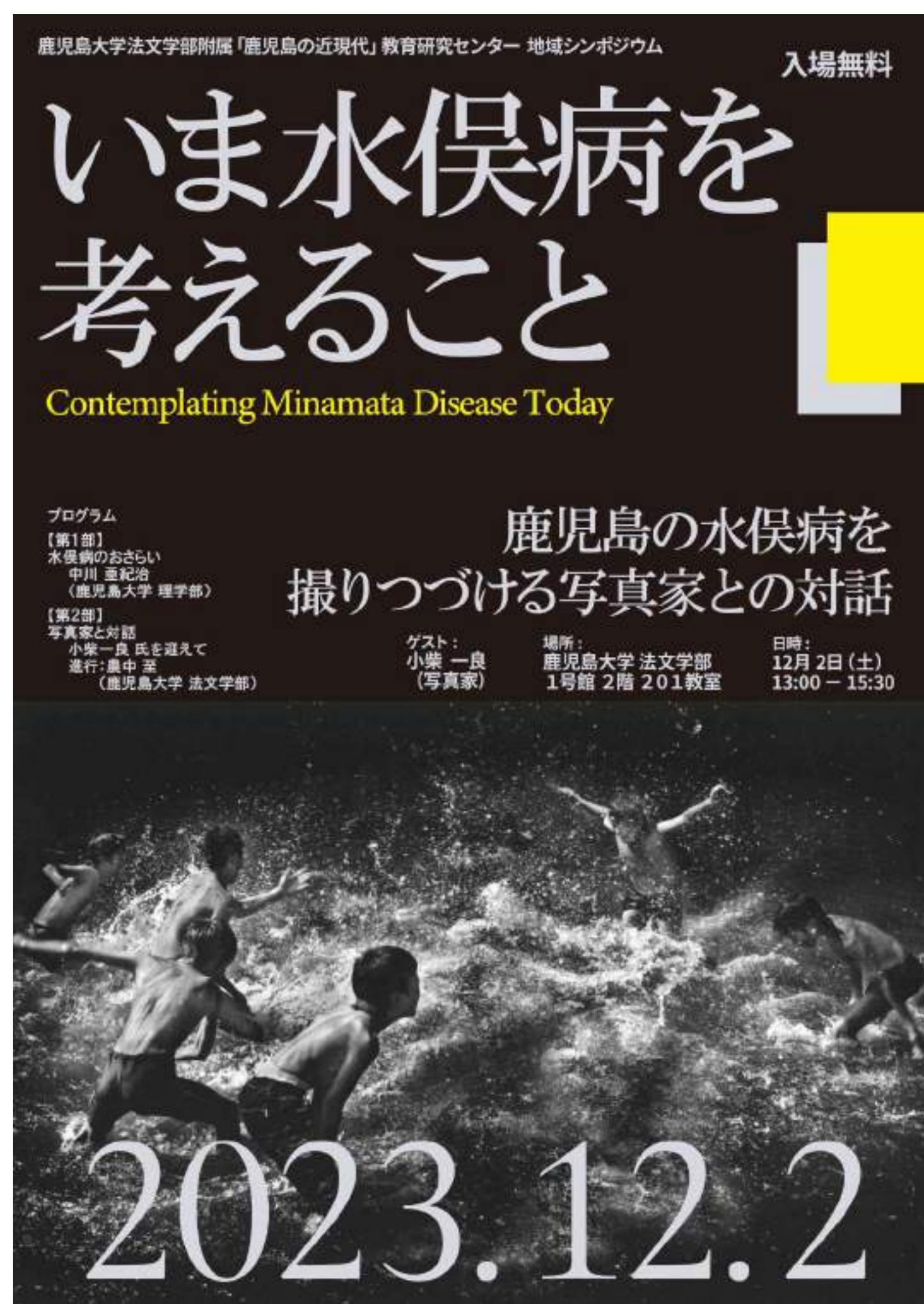
- 2023年(令和5年)
- 9月5日 読書会 顔合わせ及び説明会、理学部1号館101教室 18時～20時 参加者9名
テキストの決定「苦海浄土 第2部 神々の村 (石牟礼道子)」河出書房新社
 - 9月22日 小柴一良氏の自宅(大阪府)を訪ね、翌23日まで滞在
シンポジウム展示作品の相談、1970年代の水俣、出水取材に関する聞き取り
 - 10月6日 読書会 第1回 参加者11名 テキスト P197-225
 - 10月20日 読書会 第2回 参加者 7名 テキスト P225-253
 - 10月27日 読書会 第3回 参加者 7名 テキスト P253-282
 - 11月10日 読書会 第4回 参加者 7名 テキスト P282-309
 - 11月24日 読書会 第5回 参加者 6名 テキスト P309-338
 - 11月29日 南日本新聞 シンポジウムの事前紹介記事が掲載される
 - 12月2日 シンポジウム 法文学部 1号館 201教室にて13時～15時半の開催
タイトル「いま水俣病を考えること 鹿児島を振りつづける写真家との対話」
登壇者：小柴、中野、中川 進行：農中 県内外より80名を超える参加者
第1部 水俣病のおさらい 中川亜紀治 (鹿児島大学理学部)
第2部 水俣を撮る写真家との対話 小柴一良氏 (写真家)
中野あずさ氏 (南日本新聞社)、中川亜紀治の計3名が登壇
奥羽香織氏による一般社団法人「水俣・写真家の眼」活動紹介
 - 12月3日 南日本新聞 シンポジウム開催後の記事、小柴、中川、奥羽の音が掲載される
 - 12月3日 鹿児島県出水市の見学と調査 9時 鹿児島市を出発
出水市の水俣病関連地区(荒崎、米ノ津、前田など)を巡り小柴氏から解説
玉利智佳子氏(鹿児島市役所、観光学)からも助言
 - 12月4日 MBCニュースナウ 出水市の見学調査が紹介される(約10分の放映)
 - 12月8日 読書会 第6回 参加者12名 テキスト P338-366
 - 12月9日 毎日新聞(鹿児島、熊本版) シンポジウム開催後の記事が掲載される
 - 12月22日 読書会 第7回 参加者 7名 テキスト P366-394
 - 12月28日 シンポジウムの手書きアンケート、電子テキスト化の作業開始
- 2024年(令和6年)
- 1月5日 読書会 第8回 参加者10名 テキスト P394-422
 - 1月5日 鹿児島の近現代センターHP掲載用の原稿を入稿
 - 1月10日 シンポジウム講話と対談の文字起こし作業開始
 - 1月17日 全学HP掲載用の原稿を入稿
 - 1月19日 文教速報の原稿を入稿
 - 1月19日 読書会 第9回(最終回) 参加者10名 テキスト P422-442
 - 1月23日 近現代センターニュースレターの原稿を入稿
 - 2月20日 水俣見学ツアー 読書会メンバーから7名の参加、1泊2日で行った
水俣病センター相思社、水俣病歴史資料館見学、DVD視聴、相思社に宿泊
市内の水俣病関連箇所、漁港集落などを見学、カラモボックス訪問
 - 2月21日 読書会及び水俣見学ツアーの感想文の受領
 - 3-4月

小柴一良 写真家
中野あずさ 南日本新聞社
玉利智佳子 鹿児島市観光交流局 観光交流部
奥羽香織 一般社団法人水俣・写真家の眼 プロジェクトコーディネーター
吉永利夫 一般社団法人水俣・写真家の眼 理事・事務局長

プロジェクト
協力者

6 今年度の活動を終えて

読書会やシンポジウムでは、鹿児島が水俣病に直面する地域であるとい
う事実が少なからぬ驚きをもって受けとめられた。史実を知る事を重視し
たプロジェクトの意義がここにみだせる。写真表現と水俣について活発
な質疑が交わされた事は、水俣病の継承に芸術を含む多様な色が有効で
ることを示している。観光の視点からも議論した。観光にはホストが不可欠
であるが、仮にいま出水における水俣病ツーリズムを考えた場合、「ホス
ト不在の観光」になる危惧があると考えられる。
プロジェクトで得た知見は、自身の共通教育科目や理学部専門科目、ま
た今後の読書会などを通して学生や市民にも還元し、幅広く記録の継承を
試みてゆく。教育学や社会学分野との協働も目指す。



小柴氏の作品を配したシンポジウムのポスター
B2サイズを学内外に70枚掲示、またチラシ500枚を配布した